青森県五所川原市 なんでもかだるべし～うら【2019年度】

テーマ
市浦（しうら）の元気拡大プロジェクト

実施概要

●第1回／話題提供とワークショップ
「田舎ほど元気のタネはいっぱいある」
2019年6月16日（日）

●第2回／大学生による市浦に関する研究発表・話題提供とワークショップ
「地域を元気にするためのポイント」
2019年8月26日（月）～ 27日（火）

●第3回／大学生による提案・ワークショップ
「これからの活動の方向性について」
2019年10月28日（月）～ 29日（火）

◎開催場所／青森県五所川原市
市浦コミュニティセンター

［参加者］

◆支援団体
なんでもかだるべし～うらの皆さん
五所川原市市浦地区の皆さん

◆特別参加
尚絅学院大学（宮城県名取市）張ゼミナールの皆さん

★まちづくりパートナー
菊池 新一氏（認定NPO法人 遠野 山・里・暮らしネットワーク会長 チーフパートナー）
中島 淳氏（（株）カルチャーアットフォーシーズンス 代表取締役）

■東北電力株式会社
青森支店 副調査役 木村 政希（当時、第1回・第2回・第3回）
弘前営業所 所長 相内 文雄（当時、第1回・第3回）

9年にわたる活動を見つめ直し 新たな一歩を踏み出す。

チーフパートナーから
ひとつ実現すれば、夢は繋がる。

●菊池 新一氏

まちづくりで大切なのは、なにかひとつでもアイデアを実現させること。それが突破口になって、次々と夢がかなうようになるものです。私が暮らす岩手県遠野市でのきっかけは伝統芸能の復活でした。そこから道の駅やグリーンツーリズムまで、延々と繋がっています。熱意と愛情にあふれた市浦の皆さんも、これから何かを起こせると期待しています。

第三者の視点を持つ学生を迎え まちの魅力と課題を抽出。

2005年に青森県五所川原市と飛び地合併した旧市浦村地区で、まちの活性化に取り組む「なんでもかだるべし～うら」。まちづくり元気塾では、それまで9年にわたる同団体の活動を見つめ直し、新たな一歩を踏みだすために議論しました。尚絅学院大学（宮城県名取市）の学生が参加したことにより、第三者の若者の視点から出された指摘や提案も多く、今後の取り組みへの期待がふくらみました。

第1回では、話題提供として菊池氏が岩手県遠野市の事例を紹介。まちづくりではひとつの小さな成功体験が大きな成功へと繋がる傾向があることや、伝統芸能のコミュニティなど心の繋がりが活動の原動力になることについてお話がありました。

まちづくりパートナーのリードで
さまざまな学びを共有する参加者

中島氏がリードするワークショップには、尚絅学院大学の学生や教授も参加。①市浦の良いところ、②市浦の課題、③これからどのような地域になれば良いの

か、これら3テーマについてワークショップと発表を実施。参加者からは「住民自身が誇れるまちにしたい」など、将来に向けての展望などが語られました。

地元だから気付かない魅力も地元だからできるアイデアも。

第2回は、地元の方々の熱意を肌で感じたことをきっかけに、大学生たちが自ら調べた「市浦の魅力」についての研究発表から始まりました。地元の参加者からは「発表を聞いて、暮らしていると気付かない市浦の魅力や、市浦だからこそ実現できそうなアイデア、どちらも見えてきた」と感謝の声も。

地域の中と外の両面から
思いを語り突破口を探る

発表を受けて中島氏は「まちづくりは、住民や行政をどうやって動かすかが大切。『共有』と『共感』がキーワード」とアドバイス。さらに菊池氏は「地域づくりの原動力は人であり、住民が地域の魅力を、誇りをもって後世に伝えていくことが重要になる」と述べました。

ワークショップでは「津軽豊年祭（地元の神社で農作物などの豊作を祝う祭礼）」への支援について、参加者全員で意見交換を行いました。すると、これまでのように準備や開催に関わるだけでは、活動が広がらないのではないかとの意見が。今後は地域の関係者と連携し、地域が一丸となって住民が誇れる祭りに育ててはどうか、といった意見も出されました。

初めて市浦地区を訪れた大学生にも
地域への共感が広がっていく

議論が白熱。「露店を出店して楽しく活動資金を得よう」「もっと子ども向けにシフトしよう」といったアイデアが次々と披露されました。

地域の「近い将来像」をイメージし明快なコンセプトを与える。

第3回も、大学生の自主的なプレゼンテーションで始まりました。市浦の皆さんの力になりたい、との思いから考案した市浦の史跡や名所を巡るスタンプラリーを提案。QRコードなどを活用し、幅広い世代が楽しむことのできるアイデア

地域の誇りを育て続けるため明快なコンセプトの共有を。

には、ぜひ実現させたいとの声が上がりました。

ワークショップは、第2回で話題になった「津軽豊年祭」への住民参加のあり方を集中的に議論。参加者は積極的にそれぞれの思いを述べ、今後の活動イメージがまとまっていきました。

最後に、菊池氏は全3回の総括として「イベントや祭りはあくまで手段。開催までのプロセスや次に向けての反省が重要」とアドバイス。中島氏は、「人口減少や少子高齢化を踏まえて、地域の『近い将来像』をイメージしてみよう。そして実現するためのコンセプトや戦略を、現時点から明確にしていこう」と提案しました。

参加者からは「今後は外からの声も取り入れながら、住民自身の力で地域全体を盛り上げたい」という声も上がり、活動は新しいステージを迎えようとしています。

ボードに書き連なった課題からは
将来へのビジョンが見えてくる

参加者からひとこと

市浦のアイデンティティとなる場を育てたい。

●なんでもかだるべし～うら
柏谷 祐美子代表

まちづくり元気塾では、「津軽豊年祭」への関わり方を切り口にして、将来の市浦のために何をすべきかをたっぷり議論しました。自分たちの思いや活動がもっと地域の方々に伝わるよう、当団体のコンセプトを明確にしたいですね。市浦に関わる人たちのアイデンティティになるような「場」を、早く育てたいと思います。

岩手県九戸郡洋野町 北三陸うみの学校【2019年度】

テーマ
地域で活躍する大人たちと地元中高生を結び付け、両者の対話を通じて中高生が地域に関心を持ち、地域を良くするアイデア「マイプロジェクト」を発掘する

実施概要

●第1回／オリエンテーションと話題提供、ワークショップ
「まちづくりを学び、考え、活動しよう」
2019年8月28日（水）～ 29日（木）
●第2回／話題提供とワークショップ
「種市高校の生徒による地域課題解決のためのマイプロジェクトづくり」
2019年12月2日（月）
●第3回／フィールドワークとマイプロジェクトの発表、総括
「洋野町の漁業・水産業のバリューチェーンを知ろう」
2020年10月21日（水）
◎開催場所／岩手県九戸郡洋野町 岩手県立種市高等学校、ひろの水産会館ウニーク（第1回・第2回）、小子内浜漁協　ほか（第3回）

［参加者］
◆支援団体
北三陸うみの学校の皆さん
岩手県立種市高等学校の皆さん、洋野町の皆さん
インフィニティ国際学院の皆さん　ほか
★まちづくりパートナー
橋立 達夫氏（作新学院大学 名誉教授 チーフパートナー、第3回はリモート参加）
岡崎 エミ氏（東北芸術工科大学 コミュニティデザイン学科長、第1回）
菊池 新一氏（NPO法人 遠野 山・里・暮らしネットワーク会長、第2回・第3回）

■東北電力株式会社
岩手支店 総務広報部長 尾形 直也（第1回）

洋野のダイバーも漁師もかっこ良い！地域を変える小さな気付き。

チーフパートナーから
小さな行動が、まちを変えていく。
●橋立 達夫氏

まちづくりとは、住民一人ひとりが「前向きに生きる」ための条件だと考えています。住民それぞれが暮らしのベクトルをちょっとずつ前向きに変える。たとえば朝の挨拶など、小さな行動が家庭に笑顔を増やし、いつの間にかまちの雰囲気を変えていく。もちろん、まち全体はすぐには動きません。でも、一人ひとりが少しずつ動けば、まちは変わります。

大人たちとの対話が刺激となり高校生に気付きをもたらす。

岩手県の三陸海岸沿いでも最北端に位置する洋野町。漁業のまちで活動する「北三陸うみの学校」は、漁師や水産業経営者と高校生が対話する教育プログラムを通じて、地域特有の水産業の魅力を可視化し、未来の漁業従事者育成を目指しています。

まちづくり元気塾では、同団体と地元の岩手県立種市高等学校がコラボレーション。地域で活躍する大人たちと高校生が対話し、地域を良くするアイデアを「マイプロジェクト」としてまとめることを目指しました。

第1回では、はじめに橋立氏が、「自分たちが暮らす地域をより良くしようと住民一人ひとりが行動することがまちづくりに繋がる」と紹介。さらに地元の漁師や役場職員などと高校生25名の対話やまちづくりパートナーの岡崎氏がリードするワークショップが行われました。高校生たちからは「洋野は海がきれいで、ウニやアワビが美味しい」「洋野を中心に活動する南部ダイ

高校生が地元の漁師を囲み
共に洋野町の未来像を描く

子どもたちの未来のために
大人に何ができるか、考えつくす。

バーや漁師は格好いい」といった声が聞かれ、地元の魅力を再認識した高校生たちによる「マイプロジェクト」づくりがスタートしました。

ひとつの成功体験が取り組みに持続性を与える。

第2回は、種市高校の生徒30名に加え、洋野町職員、地域おこし協力隊員、料理店経営者などの地域で活躍する大人が「プレイヤー」として参加しました。菊池氏の話題提供では、東日本大震災の被災地支援

地域で活躍する「大人」たちが
教室を訪れ、体験を伝える

として、遠野市では主婦たちが手編みのブローチを作製・販売しており、この活動には地元の高校生も関わっていることについて紹介。「高校生にもできる活動は必ずある」と参加者を励ましました。続いて行われたワークショップでは、地元の「プレイヤー」たちから興味や趣味を活かしたライフプランづくりなどについてさまざまな体験談や意見が出され、高校生も自分たちの考えを積極的に発言しました。

後半は、まちづくりパートナーと支援団体メンバーで「子どもたちが描く未来のために、地域の大人たちは何ができるか」と題してディスカッションを実施。メンバーからは「学生のマイプロジェクトづくりには、今後もニーズがあるはずなので、マイプロジェクトづくりを継続させるために経済的な面でもサポートが必要」という意見が。これについて菊池氏は「行政の補助金などの活用も視野に入れながら、まずは、わかりやすい成果を出したい。ひとつでも成功

笑顔の岡崎氏が高校生から
地域への思いを引きだす

体験があれば、高校生も自信を持って活動を続けていける」とアドバイスしました。

洋野町のバリューを結んで新しい可能性を広げる。

第3回は、国際的な人材育成を行うインターナショナルスクールであるインフィニティ国際学院の学生5名とのフィールドワークからスタートしました。「洋野町の漁業・水産業のバリューチェーンを知ろう」というテーマのもと、水産業と水産加工業の現場で、体験活動を実施しました。また、種市高校の生徒による「マイプロジェクト」の発表を動画で視聴。橋立氏は「すばらしい取り組みが続いている。この高校生の努力をもっと地域の方々に広く知らせるべき」と高く評価しました。

高校生たちの発表を受け、眞下代表は「洋野の水産業が持続可能な形で次世代へと引き継がれていくためには、水産業の強化だけでは足りない。教育のエッセンスが必要ではないか。まずは、地域全体で若者に資本や時間を投資しようというマインド醸成が必要だろう。将来的には、得られたノウハウを使ってコンサルティングなどもやってみたい」と今後への展望を述べました。

全3回のまとめとして、菊池氏は「地域の住民が、このまちはすごいんだと誇りを持って言えるようにしたい。それこそがまちづくりだ」とコメント。橋立氏は「いずれ『高校生が変えたまち』として先進事例になり得る地域だ。情報をどんどん発信してほしい」と結びました。

洋野町の新たなバリューを探し
学生たちとフィールドワークへ

参加者からひとこと

洋野町から先進のモデルを。

●北三陸うみの学校
眞下 美紀子代表

手探りの活動だったのが、まちづくり元気塾の支援で「目に見える流れ」ができてきたように感じています。中高生など若い世代との関係づくりも進みました。漁業関係者をはじめ地域の方々を巻き込んでの取り組みは、ほかにない貴重な財産に育つのではないでしょうか。新しい産業おこしと人材育成のモデルを、洋野町を起点に広げていきたいと思います。

山形県天童市 高擶薄荷爽草の会【2019年度】

テーマ
ハッカという地域資源を使ったまちづくり

実施概要

●第1回／話題提供とワークショップ
「高擶地区の魅力とまちづくりについて」
2019年7月20日（土）
●第2回／話題提供とワークショップ
「高擶・実家プロジェクトの実施に向けて」
2020年1月18日（木）
◎開催場所／山形県天童市　高擶公民館　ほか

［参加者］
◆支援団体
高擶薄荷爽草の会の皆さん
高擶地域づくり委員会の皆さん　ほか
★まちづくりパートナー
志賀 秀一氏（（株）東北地域環境研究室 代表 チーフパートナー）
寺川 重俊氏（（有）寺川ムラまち研究所 代表取締役、第1回）
■東北電力株式会社
山形支店 部長（広報担当）市ノ渡 一也（第1回・第2回）
最上村山営業所 所長 関野 博朗（第1回）

古くから伝承されるハッカを活かし地域の魅力を再発見しよう。

チーフパートナーから
地域や次世代にハッカを繋げよう。

●志賀 秀一氏

高擶地区には、歴史ある街区に加えて新興の住宅地が広がりつつあります。地域の住民同士が繋がり、外に向けて胸を張って高擶地区を自慢できるようにするためには、次世代の子どもたちに高擶地区の価値や地元で生きる思いを繋げていくことが大切です。その時、ハッカの果たす役割は大きく、これからの広がりに大いに期待したいと思います。

多様な住民を結ぶため改めて地域を見つめ直す。

明治時代、高擶地区は、ハッカの生産地として知られていました。現在、北海道北見地方で盛んなハッカ生産の礎を築いたのも高擶地区の出身者と伝えられています。「高擶薄荷爽草の会」は、地域資源としてハッカに着目。ハッカの魅力や高擶との関わりを共有しながら、地域内での連携や地域間交流・世代間交流の拡大を目指しています。

高擶地区は天童市のほぼ中央部の平坦な地域で、歴史的な寺社などが残る地域に加えて、新興の住宅地開発も進んでいます。このため、地区と住民の関わりは多様化しています。まちづくり元気塾に集まったメンバーも、地元出身で農家の方、結婚を機にこの地に住むことになった方、隣町の会社に勤務する方などさまざまです。

高擶のハッカ自生地は
山寺からの清らかな水で潤う

そこで第1回は、まず自分たちの住む地域を改めて見つめ直すため、メンバーとまちづくりパートナーが一緒に現地視

察を実施。「高擶地域づくり委員会」が作成した「高擶歴史ロマン探訪マップ」を参考に、高擶城址の碑を手始めに、城下の街路や水路、板張りの黒塀を持つ古民家や神社仏閣を巡りました。続いてメンバーがハッカを栽培する圃場を見学。ハッカ畑の風情や葉の香りを体感しました。

地域の良さを再発見できたら共同作業に踏みだそう。

現地視察の後、志賀氏が「地域の元気とこれからのまちづくり」と題し話題を提供。「自分たちの地域を知り、何があるかを理解し、それらを組み合わせて目標を定めよう。目標を共有したら、一人ひとりが同じ方向に一歩を踏みだす。まちづくりは『一人の百歩より百人の一歩』が大切」とアドバイスしました。

寺川氏（右端）のリードで
高擶の魅力を再発見

続いてのワークショップでは寺川氏がリード。付箋への書きこみを使って、参加者から高擶地区の良いところ・悪いところを聞きだし、高擶の宝となる地域資源と克服すべき課題を抽出・整理しました。ハッカだけではなく、史跡の豊富さや人情の厚さ、交通の便や住環境の良さなど、まちづくりに活かせる要素がたくさん見えてくる一方、昔ながらの人間関係や「家」の慣習など、新旧住民の融和を妨げている要素も浮き彫りになってきました。これらの要素を、どう取り組みに活かしていくかについてアイデアを出しあい、第1回は終了。寺川氏からは「もっと多くの地域の方々と共有することが大事。それには共同作業が有効だ。たとえば中学生と一緒に地域の長所・短所マップをつくって発表会をすれば、親子で参加してもらえるのではないか」との提言がありました。

さわやかなハッカの香りを
もっと広める工夫を模索

ハッカを誇りに思う熱意は子どもたちにも浸透していく。

第2回は、寺川氏の発案による「高擶・実家プロジェクト」について検討しました。これは、会のメンバーと新興住宅地の住民がハッカを通じて交流し、地域外にも輪を広げようという取り組みです。

高擶らしい「メニュー」を集め地域内外との交流人口拡大へ。

同会の長谷川氏からは「前回の提言を受けて取り組みを進めたところ、地元の小学生やその親たちに向けたイベントが実現でき、ハッカが地域に浸透しつつある」との報告が。一方で、「こうした活動は限られたメンバーで行っているため、もっと周囲を巻き込んで、地域内外と交流を広めたい」との声も上がりました。

ワークショップではプロジェクトを具体化するため、高擶ならではのメニュー開発に挑戦。ハッカ体験と芋煮会の組み合わせ、ハッカ・ツーリズム、ハッカ・ロード整備などのアイデアが飛びだしました。志賀氏は「ハッカありきだけでは活動は続かない。高擶には大いに価値があり、それを誇りに思う。そういう熱意がメニューを実現し、活動を広げていく。その時、高擶はほかの地域の人からも思いを寄せられる素敵なまちになるだろう」と総括しました。

地域に交流を呼ぶ「メニュー」を
さまざまな角度から検討

参加者からひとこと

ハッカでできることは、もっと多い。

●高擶薄荷爽草の会
長谷川 喜久氏

ハッカに出会って、これは地域に絆をもたらすツールになると見込んで「ハッカから何をつくるか」ばかり考えていました。でも、まちづくり元気塾を通じて、より広い視野で考えるようになりました。「ハッカでできること」はもっとたくさんあるはず。ハッカを通じて、高擶のさまざまな方々と一緒に汗をかき、協働の精神でつながりを育てていきます。

新潟県上越市 板倉区光ヶ原高原にぎわい創出実行委員会【2019年度】

テーマ
板倉区の観光スポットの知名度アップと魅力の発信を通じた誘客の促進

実施概要

●第1回／現地調査・話題提供とワークショップ
「地域の宝を語れるまちに」
2019年6月1日（土）～2日（日）
●第2回／話題提供とワークショップ
「地域づくりの視点とスイッチの入れ方」
2019年6月29日（土）～30日（日）
●第3回／話題提供とワークショップ
「自然を生かしたスポーツアクティビティによる
継続的なまちづくり・地域活性化」
2019年10月5日（土）～6日（日）
◎開催場所／新潟県上越市板倉区
板倉区コミュニティプラザ　ほか

［参加者］
◆支援団体
板倉区光ヶ原高原にぎわい創出実行委員会の皆さん
上越市板倉区総合事務所の皆さん
地域の中学・高校の先生と生徒の皆さん　ほか
★まちづくりパートナー
柳井 雅也氏（東北学院大学教養学部教授　チーフパートナー）
役重 眞喜子氏（岩手県立大学総合政策学部 講師）
白畑 誠一氏（花巻スポーツランド代表）
■東北電力株式会社
新潟支店 部長（企画・広報担当）白井 隆（第1回）
上越営業所 所長 阿部 誠一（当時、第2回）

地域の宝を見直しながら
自分たちの言葉でストーリーを紡ぐ。

チーフパートナーから
見方を変えると田舎の良さが見えてくる。
●柳井 雅也氏

現在、「ファストフード」に象徴される都会の忙しい暮らしをしている人ほど、「スローフード文化」のある「田舎の暮らし」に憧れています。そんな風に見方を変えると「田舎の良さ」が見えてきます。板倉区の良さを見つけ、良さをどうやって観光に結びつけるか。にぎわいのストーリーを地域のみんなで描きましょう。

地域の魅力を、自分たちの言葉で伝えていくために。

新潟県上越市板倉区は、豊かなブナ林や澄んだ湖水を持つ光ヶ原高原、新潟県指定文化財の山寺薬師など、多様な地域資源に恵まれた地域です。しかし、近年は観光客の入れ込みが伸び悩み、まちのにぎわいも失われ始めています。

第1回では、板倉区の魅力をもう一度とらえ直し、どうアピールするべきか、パートナーから話題提供とワークショップが行われました。

話題提供で役重氏は「地域の宝を語れるまちに」と題して、岩手県花巻市東和地区のマラソンイベントの取り組みなどの成功事例を紹介。仲間づくりや楽しみながら取り組むことの大切さに言及しました。また、ワークショップに先立ち実施した地域資源の視察では、高原地帯や延命清水、山寺薬師などを訪問。役重氏は「板倉区には、文化や歴史、素晴らしい自然環境など、多くの財産がある。これらの魅力をストーリー立てし、訪れる

役重氏（左端）も参加者と共に
アイデアを出していく

人たちに皆さん自身の言葉で語れるようにしてほしい」とアドバイスしました。

ワークショップでは、板倉区の地域資源の活用やPR方法について、グループごとにアイデアを出すことに。光ヶ原高原の眺望や宿泊施設を活かしたキャンプや星空ツアー、バイクツーリングの受け入れ施設や歓迎イベントなど、ユニークな提案に会場が沸きました。

中学生の斬新なアイデアが
会場を沸かせる場面も

中学生の発想が活動のスイッチを入れる。

第2回は、柳井氏の話題提供と役重氏によるワークショップを実施。地元の中学生も参加し、しっかりした意見発表には感嘆する声も上がりました。

話題提供では、柳井氏が古民家再生や商品開発の事例を通じて、アイデア次第で地域の活性化が実現できることを強調。役重氏のワークショップでは、第1回で出された観光活性化のアイデアをさらにブラッシュアップ。中学生の発案による吹奏楽団を交えた音楽キャンプ、地元産の蕎麦や野菜を味わうマラソンイベントなど、具体的な企画が次々と提案されました。

企画はさらに板倉区全体で行うもの、光ヶ原高原エリアに特化したもの、短期・長期的な取り組みに分け、それぞれ実現に向けて検討されました。

様々な企画を確認した役重氏からは

板倉区の地域資源のひとつ
「山寺薬師」の三尊像を視察

「小さな企画でも、実際にやってみると大きな経験が得られるもの。その積み重ねがまちづくりを進める時に重要です。これからは、小規模なもので良いので、何かひとつでも実現させることが大事。これからが本番です」とエールが送られました。

「豪雪の冬」をチャンスに。雪上車（CAT）ツアーを具体化。

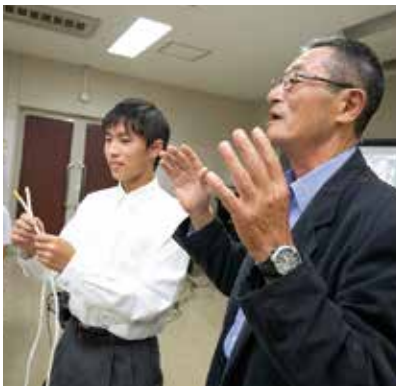
第3回は、第2回までにまとめられた企画をもとに「冬季開催の体験型観光プログラム構築」に絞り込んだ検討を行いました。地元の高校生も参加し奮闘しま

アイデアで終わらせず、成功体験を積み重ねていく。

した。

まず、白畑氏が事例を紹介。岩手県花巻市で冬季のアクティビティを含む活動を進めている白畑氏は「何もないような河原でも、雪があればスノーモビルで大人も子どももたっぷり楽しめる。人を集めるには、そこでしかできない『遊び』の発見と提供が必要」と述べました。続くワークショップでは、役重氏のリードでターゲット層の絞り込みやイベントのコンテンツについてより詳細に検討。豪雪を活かして「3月下旬に雪上車（CAT）を活用したファミリー向けの雪遊び体験」を試行する方向で詰められていきました。

最後に、柳井氏が「まちづくりの企画



高校生と「ロープ遊び」をしながら
事例を紹介する白畑氏

や組織はシンプルに立ち上げ、楽しく経験を積みながら、新しいアイデアを付加していくのが大切」とメッセージを送り、全3回を締めくくりました。

参加者からひとこと

10年、20年後に向けた楽しみを

●板倉区光ヶ原高原にぎわい創出実行委員会 増村 剛代表

ワークショップに中学生、高校生が参加してくれた際、はっと気づきました。10年後、20年後を担う彼らのために、今から板倉を良くしないと間に合わないんだと。これからは、まちづくり元気塾の

経験を活かして、幅広い世代の方々と一緒に地域の未来を楽しく考えながら、次世代につなげていきます。

集合研修型
まちづくり元気塾®マスターコース2019 in 仙台

これまでの支援団体が集った「マスターコース2019 in 仙台」。活動の現状や課題について共有し、議論を行いました。

にこやかに議事を進める
岡崎アドバイザリーボード座長

まちづくりへの思いを
熱く語る志賀氏

豊富な実践経験をもとに
的確にアドバイスする橋立氏

大学生の活動報告を
しっかりと受け止める柳井氏

支援当時を振り返り
さらなる前進を訴えた菊池氏

実施概要

日時／2019年7月3日（水）
場所／宮城県仙台市 東北電力本店ビル 1F大会議室
実施内容／①「2018年度支援団体からの活動報告」
②「全員参加の元気塾会議」
テーマ／「若者との交流を通じたこれからの地域づくりについて」

◆参加者

●まちづくり元気塾支援団体 ほか

- ままりば［岩手県大槌町 2018年度支援団体 1名］
- 有限責任事業組合まざ～らいん［宮城県東松島市 2018年度支援団体 4名］
- 勝常区環境保全会［福島県河沼郡湯川村 2018年度支援団体 4名］
- 坂井活性化実行委員会［新潟県胎内市 2018年度支援団体 2名］
- 宮古観光創生研究会［岩手県宮古市 2016年度支援団体 1名］
- 特定非営利活動法人ふじさと元気塾
  ［秋田県山本郡藤里町 2016年度支援団体 1名］
- 柳橋きらり塾 舞の里けやき亭（柳橋町内会）
  ［福島県郡山市 2016年度支援団体 2名］
- 男鹿市地域おこし協力隊［秋田県男鹿市 1名］
- 秋田大学公認サークル「ARC（アーク）」［秋田県秋田市 2名］

以上9団体　計18名

◆まちづくりパートナー

岡崎 昌之氏（法政大学 名誉教授、アドバイザリーボード座長）
志賀 秀一氏（株式会社東北地域環境研究室 代表）
橋立 達夫氏（作新学院大学名誉教授）
柳井 雅也氏（東北学院大学教養学部教授）
菊池 新一氏（認定NPO法人遠野山・里・暮らしネットワーク会長）
寺川 重俊氏（有限会社寺川ムラまち研究所代表取締役）
役重 眞喜子氏（岩手県立大学総合政策学部 講師）

■東北電力株式会社

本店広報・地域交流部長 山形 安生 ほか8名、岩手支店、秋田支店・宮城支店・福島支店・新潟支店より7名　計16名

特有の文化・風土が生き続けている地域に、若者は惹きつけられる。

①「2018年度支援団体からの活動報告」

取り組みの成果や悩みを共有し、課題解決の糸口を探ろう。

●支援後の実践や新たな課題をパートナーたちが検証。

「マスターコース」は、まちづくり元気塾に参加した方々が一堂に集まり、日頃の取り組みの成果や悩みを共有し、新たなネットワークづくりを行いながら課題解決の糸口を見つけていく「集合研修型」の元気塾です。「マスターコース2019 in仙台」には、2018年度にまちづくり元気塾が支援した4団体をはじめ計7団体15名、まちづくりパートナー 7名が参加。さらに、まちづくりに関わる若者の団体から2団体3名が加わりました。

前半では、これまでまちづくり元気塾が支援した団体より、支援終了後の活動について報告がありました。「宮古観光創生研究会」はゲストハウスの実現について、「ふじさと元気塾」は農家民宿6軒の営業開始について、それぞれ報告しました。「柳橋きらり塾」からは、いったん動き出した農村レストランの運営で器材面などの問題が生じていると報告されました。

東日本大震災の被災地域で活動する「ままりば」及び「まざ～らいん」からは、取り組みの持続性や地域での存在感を高めるため、経済的な自立を目指し、商品開発や販路拡大に尽力しているとの報告が。これに対して菊池氏からは肩の力を抜き「脱力的」に取り組むことの大切さについてアドバイスがありました。

「勝常区環境保全会」からは、当初想定しなかった地域の女性の参画が活発化し、地域の新しい祭りである収穫祭の実現に大きな力となったとの報告も。「坂井活性化実行委員会」は、まちづくり元気塾を契機に交流が始まった大学の教員・学生グループと、地域の伝統芸能関連グループが一緒になって、新規イベントなどの成功につながったと報告しました。

役重氏はこういった「地域への新しい力の導入」を高く評価。さらに、若い人の受け入れには、地域の側できちんとした考え方を持って体制を作り、若者と両思いの関係

参加者に向けて力強い
エールを送る寺川氏

議論を緻密に分析・整理し
新たな提言に繋げる役重氏

若者の積極的な発言で
一段と熱い議論が繰り広げられた

貴重な事例の紹介を
真剣な表情で見つめる参加者

を結ぶようアドバイスしました。

長く活動するためのコツなどについて、参加者相互の意見交換も活発に行われました。

②「全員参加の元気塾会議」

まちづくりに共通する悩みを「若者」をキーワードに読み解く。

●「地域から」と「若者から」、双方向の視線で地域を見つめよう。

後半は「若者との交流を通じたこれからの地域づくりについて」をテーマに、これまでの参加団体や大学生などの参加者全員で情報提供・意見交換を行いました。

冒頭、アドバイザリーボード座長の岡﨑氏が「地域で活動する方々と地域に目が向いている若者の双方が集っている、この絶好の機会に、両者の視線で地域や自分たちの活動を見つめ直してほしい」と期待を込めて語りました。

引き続き男鹿市地域おこし協力隊員の伊藤氏と、秋田県内の大学生110名ほどが活動する団体「ARC」からの参加者が、活動事例をプレゼンテーションしました。

「ARC」創設者でもある伊藤氏からは、地域にとって若者の役割とは何か、ずっと思い悩んでいた。しかし、試行錯誤を続けるうちに「足りないものを補うよりも、地域の自立を促し、自ら進めるよう背中を押すのが大切」ということに気づき、「今はもう迷いはない」とのお話が。「ARC」のメンバーは世代や育った環境によって異なる視点を持つ人とのふれあいは、良い形で地域に刺激を与えると指摘。若者が貢献できるのは、世代間交流・地域間交流など「ふれあいを通じた地域活性化」ではないか、との考えを述べました。

会場は時折笑い声も起きて和やかなムードに包まれた

意見交換に移ると、各団体から若者・学生の受け入れについての事例紹介や質問が相次ぎ、「ふじさと元気塾」からは、若者の受け入れを「ARC」の学生との交流を通じて実現できたおかげで、首都圏の大学との連携が進んでいると報告がありました。「柳橋きらり塾」は、橋立氏と共に柳橋地区に入った学生が地元でも忘れられていた郷土料理や行事を粘り強く拾い続け、そのうちに住民にも地元に対する誇りがよみがえってきた、というエピソードの紹介がありました。

橋立氏は「農山村には、長年鍛えられた『生活の技』があり、若者がそれらと出会うと驚きとリスペクトが生まれる。すると地域の方々も嬉しくなる。それがまちづくりの新しい根っこになる」とコメント。「ふじさと元気塾」の取り組みに対して、菊池氏は「いまや『藤里地区は若者交流の先進地になった』と言える。ノウハウを求めて、各地のリーダー的人材が藤里地区を訪れるなど、さらなる活性化が期待できる」と述べました。これらの意見交換を通じて、これまで学生や若者との交流が乏しかった団体からも、受け入れに積極的な意見が飛び交いました。

●自らの地域を大切にすることが若者を惹きつけ、交流を広げる。

意見交換が続く中、柳井氏から「学生や若者の活動では、これで良いと決めつけず、常に新しいニーズを把握し、切り口を変えていってほしい」との助言がなされました。これに対して「ARC」の学生は「活動のあり方を含めて、学生が社会人と共に歩む意義を常に考え続けたい」と回答。寺川氏は「時には活動に『少し高いハードル』を設定してみてほしい。皆さんの地域や団体には底力がある。その底力を信じて、取り組んでほしい」とエールを送りました。志賀氏は「地域の風土を物語るような料理や芸能、景観を大事にするほど、地域の個性は際立つ。個性を保っていれば、よそから来た人がほめてくれて、さらに新しい魅力、別の面白さまで見つけてくれる」と述べました。

締めくくりに、岡﨑氏から参加者全員に対し、「いまの若者は、物的な所有欲より、自分自身の存在を認めてもらいたい気持ちが強い。しかし、近年は特に社会の中核で経験と研鑽を積み重ねた方々とふれあう機会が少なくなり、若者は孤立している。歴史や伝統技術を大切にし、世代や性別の違いを尊重し合って共存できる『地域』には、大いに若者を惹きつける魅力があり、価値があるはずだ。地域を大切にしながらの行動こそが、若者を地域に近付け、育てていく力になるのではないか。若者も地域の方々も、その事を考え続けてほしい」とのメッセージが送られました。

岡﨑氏のメッセージは参加者に大きな拍手で迎えられ、マスターコース2019は盛況のうちに幕を閉じました。